

「赤石小」いじめ防止基本方針

紫波町立赤石小学校

I いじめの防止等のための対策に関する基本的な考え方

1 いじめの問題に対する基本的な考え方

いじめは、いじめを受けた児童の教育を受ける権利を著しく侵害し、その心身の健全な成長及び人格の形成に重大な影響を与えるのみならず、不登校や自殺などを引き起こす背景ともなる深刻な問題である。また、最近のインターネットを介した、いわゆる「ネット上のいじめ」は、いじめを一層複雑化、潜在化させている。

いじめの問題は、学校が一丸となって組織的に取り組むことを第一義とし、家庭、地域、及び関係機関等の協力を得ながら、社会総がかりで対峙することが必要である。また、いじめの問題の解決には、児童にいじめを絶対に許さないという意識と態度を育てることが大切である。

こうした中、本校は、学校教育目標「相手を思いやり、たくましい子ども」について、学年・学級経営を中心にして育むことにより、いじめを生まない環境を築くとともに、すべての児童が生き生きとした学校生活を送ることができるよう教育活動を推進する。そのために、校長のリーダーシップのもと、全教職員がいじめの問題に対する感性を高め、組織的にいじめの未然防止、早期発見・早期対応に取り組む。

2 いじめの定義

「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童が在籍する学校に在籍している等当該児童と一定の人的関係のある他の児童等が行う、心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

【法第2条】

3 いじめの基本認識

- (1) いじめは人権侵害であり、いかなる理由があっても許される行為ではない。
- (2) いじめは人間関係のトラブルを機序としているため、いじめられた側及びいじめた側の両児童並びにそれを取り巻く集団等に対し、適切な指導と支援が必要である。
- (3) いじめは教師の児童観や指導の在り方が問われる問題である。
- (4) いじめは家庭教育の在り方に大きな関わりをもっている。
- (5) いじめは学校、家庭、地域社会などすべての関係者がそれぞれの役割を果たし、一体となって取り組むべき問題である。
- (6) いじめはその行為の態様により暴行、恐喝、強要等の刑罰法規に抵触することがある。

II いじめの未然防止のための取組

1 教職員による指導について

- (1) 学級や学年、学校が児童の心の居場所となるよう配慮し、安心・安全な学校生活を保障するとともに児童が互いのことを認め合ったり、心のつながりを感じたりする「絆づくり」に取り組む。
- (2) 自己有用感や自尊感情を育むため、児童一人ひとりが活躍し認められる場のある教育活動を推進する。
- (3) すべての教師がわかりやすい授業を心がけ、基礎基本の定着を図るとともに、学習に対する達成感・成就感をもたせる。
- (4) 児童の豊かな情操と道徳心を培い、心の通う対人関係能力の素地を養うため、すべての教育活動を通じて、道徳教育及び体験活動等の充実を図る。
- (5) いじめ防止の重要性に関する理解を深めるための啓発その他必要な処置として、道徳、学級活動等の充実に努めるとともに、適宜、全校朝会等における、いじめ防止に関する校長講話を実施する。
- (6) 保護者、地域住民及びその他の関係者との連携を図りつつ、いじめ防止に資する児童が自主的に行う児童会活動に対する支援を行う。

2 児童に培う力とその取組

- (1) 自分も他人も共にかげがえのない命を与えられ、生きていることを理解し、他者に対して温かい態度で接することができる思いやりの心を育む。
- (2) 学級活動や児童会活動などの場を活用して、児童自身がいじめの問題の解決に向けてどう関わったらよいかを考え、主体的に取り組もうとする力を育む。

- (3) 学級の諸問題について話し合っ解決する活動を通し、望ましい人間関係や社会参画の態度を育てるとともに、違いや多様性を越えて合意形成をする言語能力の育成を図る。
- (4) 「心とからだの健康観察」を活用した心のサポート授業等をとおして、児童一人ひとりのセルフケアやストレスマネジメントの力を高める。

3 いじめの防止等の対策のための組織

本校は、いじめの防止等を実効的に行うため、次の機能を担う「いじめ対策委員会」を設置する。

- (1) 構成員
校長、副校長、主幹教諭、教務主任、生徒指導主事、養護教諭、特別支援コーディネーター
(※必要に応じて、学年主任、当該学級担任等)
- (2) 取組内容
 - ①いじめ防止基本方針の策定、(道徳教育の全体計画への位置づけ)
 - ②いじめにかかわる研修会の企画立案
 - ③未然防止、早期発見の取組
 - ④アンケート及び教育相談の実施と結果報告(各学級・学年の状況報告等)
 - ⑤いじめ防止にかかわる児童の主体的な活動の推進
- (3) 開催時期
4月、7月、9月、11月、2月の年5回の開催とし、いじめ事案の発生時は緊急開催し、事態の収束まで随時開催とする。

4 児童の主体的な取組

- (1) 児童会による「いじめ撲滅宣言」等の取組
- (2) いじめ防止標語・ポスターの作成
- (3) 好ましい人間関係づくりをねらいとした児童会行事や取組

5 家庭・地域との連携

- (1) 学校いじめ防止基本方針を、ホームページや学校通信に掲載するなどして広報活動に努める。
- (2) PTAの各種会議で、いじめの実態や指導方針について説明を行う。
- (3) いじめ防止等の取組について、学級通信や学年通信を通じて保護者に協力を呼びかける。
- (4) 授業参観において、保護者や地域住民に道徳や特別活動等の授業を公開する。
- (5) 通信等でいじめの問題についての保護者の意見を紹介する。

6 教職員研修

いじめの防止等のための対策に関する校内研修を年間計画に位置づけて実施し、いじめの防止等に関する教職員の資質向上を図る。

- (1) いじめの問題にかかわる校内研修会 年1回(8月)
- (2) いじめ問題への取組についてのチェックポイントによる自己診断 年2回(6月、2月)

Ⅲ いじめの早期発見のための取組

1 いじめの早期発見のために

- (1) いじめや人間関係のトラブルで悩む児童が相談しやすいよう、日頃から教職員と児童が信頼関係を築くように心がける。
- (2) 日常の観察については、いじめ行為の発見だけでなく、児童の表情や行動の変化にも配慮する。(学級担任は、日記等も活用する)
- (3) いじめは大人の見えないところで行われるため、授業中はもとより、休み時間、放課後においても児童の様子に目を配るよう努める。
- (4) 遊びやふざけあいのように見えるいじめ、活動の練習のふりをして行われるいじめなど、把握しにくいいじめについても、教職員間で情報交換をしながら発見に努める。
- (5) いじめの兆候に気づいたときは、教職員が、速やかに予防的介入を行うとともに、学校内で情報を共有する。
- (6) 地域や関係機関と定期的な情報交換を行い、日常的な連携を深める。

2 いじめ・Q-Uアンケート及び教育相談の実施

いじめを早期に発見するため、児童や保護者からの情報収集を定期的に行う。

- (1) 児童を対象としたアンケート調査 年3回 (いじめ: 6月、11月、1月 Q-U: 6月、11月)
 (2) 保護者を対象としたアンケート調査 年2回 (6月、11月)
 (3) 教育相談を通じた児童からの聞き取り調査 年3回 (6月、11月、1月)

3 相談窓口の紹介

いじめられている児童が、教職員や保護者に相談することは、非常に勇気がいる行為である。いじめを大人に打ちあけることによって、場合によっては、いじめがエスカレートする可能性があることを十分に認識し、その対応について細心の注意を払うこととする。いじめの兆候を発見したときは、関係する教職員で迅速に情報を共有し、適切な対応を行う。本校におけるいじめの相談窓口を下記のとおりとする。

- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| ○日常のいじめ相談 (児童及び保護者) | ・・・ 全教職員が対応 |
| ○スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの活用 | ・・・ 副校長・主幹教諭・養護教諭・教育相談担当 |
| ○地域からのいじめ相談窓口 | ・・・ 副校長・主幹教諭 |
| ○インターネットを通じて行われるいじめ相談 | ・・・ 学校または所轄警察署 |
| ※紫波町教育委員会設置の相談窓口 | ・・・ 676-6660 |
| ※24時間いじめ相談電話 (県教委) | ・・・ 019-623-7830 (24時間対応) |

4 いじめを防止するための年間計画

| | 学校の取組 | 人間関係づくりのための児童の活動 | 保護者、地域との連携 |
|-----|---|---|---------------------|
| 4月 | ・いじめ対策委員会① (基本方針の確認と情報交換) ・学習規律や校内外のくらしのやくそくの指導 | ・学級開き、学年・学級目標作り ・兄弟学級交流週間 ・1年生へのお世話活動 | ・授業参観 ・家庭訪問 |
| 5月 | | ・児童総会 ・運動会 | |
| 6月 | ・いじめアンケート① ・Q-U アンケート① ・教育相談① ・取組チェックポイントによる自己診断 | ・修学旅行 ・林間学校 | ・いじめアンケート① |
| 7月 | ・いじめ対策委員会② (情報交換) | | ・期末面談 |
| 8月 | ・いじめの問題にかかわる校内研修会 | | ・校報配布 |
| 9月 | ・いじめ対策委員会③ (情報交換) | ・陸上課外 | |
| 10月 | | ・学習発表会 | |
| 11月 | ・Q-U アンケート② ・いじめアンケート② ・教育相談② ・いじめ対策委員会④ (情報交換) | ・長縄集会 | ・授業参観 ・いじめアンケート② |
| 12月 | | | ・期末面談 ・学校評価アンケート |
| 1月 | ・いじめアンケート③ ・教育相談③ | ・鼓笛引き継ぎ | |
| 2月 | ・いじめ対策委員会⑤ (情報交換) ・取組チェックポイントによる自己診断 | ・鼓笛引き継ぎ ・6年生を送る会 | ・授業参観 ・学年・学級懇談会 |
| 3月 | | ・学級のまとめ | ・校報配布 |

IV いじめの問題に対する早期対応

1 いじめに対する措置の基本的な考え方

- (1) いじめを発見したり、通報を受けたりしたときは、特定の教職員が抱え込むことなく、速やかに組織的な対応をする。
- (2) いじめられている児童及びいじめを知らせた児童の身の安全を最優先に考えるとともに、いじめている側の児童には、教育的配慮の下、毅然とした態度で指導にあたる。
- (3) いじめの問題の解決にあたっては、謝罪や責任を問うことに主眼を置くのではなく、社会性の向上等、児童の人格の成長に主眼を置いた指導を行うことを大切にする。
- (4) 教職員全員の共通理解のもと、保護者及びPTAの協力を得て、関係機関・専門機関と連携し、対応にあたる。

2 いじめの発見・通報を受けたときの対応

- (1) いじめを発見したときは、その場でいじめの行為を止めさせ、事実関係を明らかにする。

【いじめを発見した教員等】

- (2) いじめを発見したり、通報を受けたりしたときは、速やかに「いじめ対策委員会」のメンバーに報告する。報告があった場合、校長は、直ちに「いじめ対策委員会」を開催し、校長以下すべての教員の共通理解のもと、役割分担をして問題の解決にあたる。

- ① いじめられている児童や保護者の立場に立ち、関係者からの情報収集を綿密に行い、事実確認をする。【学年主任、担任、生徒指導主事等】

- ② いじめの事実が確認された場合は、いじめをやめさせ、その再発を防止するため、いじめを受けた児童及びその保護者に対する支援と、いじめを行った児童への指導とその保護者への助言を継続的に行う。

教育上必要があると認めるときは、学校教育法施行規則第26条の規定に基づき、適切に、児童に懲戒を加える。【校長、副校長、主幹教諭、学年主任、担任、生徒指導主事等】

- ③ いじめを受けた児童が学校生活に不安を抱えている場合、複数の教職員で見守りを行うなど、いじめられた児童の安全を確保する。また、いじめられた児童が安心して教育を受けるために必要があると認められるときは、保護者と連携を取りながら、一定期間、別室等において学習を行わせる措置を講ずる。【校長、副校長、主幹教諭、教務主任、学年主任、担任、担任外、養護教諭】

- ④ いじめを受けた児童の心を癒すために、また、いじめを行った児童が適切な指導を受け、学校生活に適応していくために、スクールカウンセラーや養護教諭と連携を図りながら、指導を行う。

【副校長、主幹教諭、担任、養護教諭、担任外】

- (3) いじめの事案について、生徒指導の範疇で対応する事案であるか、警察への通報を要する事案であるかを適切に判断する。【校長、副校長】

3 いじめが起きた集団への対応

- (1) いじめを見ていた児童に対して、自分の問題として捉えさせる。【学年主任、担任】
- (2) 学級等当該集団で話し合いを行うなどして、いじめは絶対に許されない行為であり、当該集団から根絶しようという態度を行き渡らせる。【学年主任、担任】
- (3) すべての児童が、集団の一員として、互いを尊重し、認め合う人間関係を構築できるような集団づくりをすすめるよう、教職員全体で支援する。【全教職員】

4 警察との連携

犯罪行為として取り扱われるべきいじめについては、紫波町教育委員会及び紫波警察署と連携して対処する。【校長】

5 ネットいじめへの対応

- (1) インターネット上のいじめが重大な人権侵害にあたり、被害者等に深刻な傷を与えかねない行為であることを理解（刑法上の名誉棄損や侮辱罪、民事上の損害賠償請求対象となりうることも含む）させる取組を行う。
- (2) インターネット等を通じて行われるいじめを発見したり、通報を受けたりした場合は、「いじめ対策委員会」で情報を共有するとともに、被害の拡大を避けるため、当該教育委員会と連携し、プロバイダなどに情報の削除を求める。

- (3) 児童の生命、身体または財産に重大な被害が生じるおそれがあるときは、直ちに所轄の警察署に通報し、適切な援助を求める。
- (4) インターネットへの利用環境について、パソコン、携帯電話やスマートフォン等が大部分であることから、家庭の協力を得る。

6 いじめの解消

いじめが「解消している」状態とは、少なくとも以下の要件が満たされたときをいう。

- (1) いじめに係る行為が止んでいること

被害児童に対する心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）が止んでいる状態が相当の期間継続していること。この相当の期間とは、少なくとも3か月を目安とする。教職員は、相当の期間が経過するまでは、被害・加害児童の様子を含め状況を注視し、期間が経過した段階で判断を行う。行為が止んでいない場合は、改めて、相当の期間を設定して状況を注視する。

- (2) 被害児童生徒が心身の苦痛を感じていないこと

いじめに係る行為が止んでいるかどうかを判断する時点において、被害児童がいじめの行為により心身の苦痛を感じていないと認められること。この場合、被害児童本人及びその保護者に対し、心身の苦痛を感じていないかどうかを面談等により確認する。

いじめが解消に至るまで被害児童の支援を継続するため、いじめ対策委員会において、支援内容、情報共有、教職員の役割分担を含む対処プランを策定し、確実に実行する。

上記のいじめが「解消している」状態とは、あくまで、一つの段階に過ぎず、「解消している」状態に至った場合でも、いじめが再発する可能性が十分にあり得ることを踏まえ、教職員は、当該いじめの被害児童及び加害児童については、日常的に注意深く観察するようにする。

V 重大事態への対処

1 重大事態とは

- (1) いじめにより当該学校に在籍する児童等の生命、心身または財産に重大な被害が生じた疑いがあると認めるとき。
- (2) いじめにより当該学校に在籍する児童等が相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑いがあると認めるとき。

【法第28条①】

2 重大事態の報告

- (1) 学校は、重大事態が発生した場合、速やかに学校の設置者（当該教育委員会）に報告する。
- (2) 児童からいじめられて重大事態に至ったという申立てがあったときは、重大事態が発生したものとして対処する。

3 重大事態の調査

■学校が調査の主体となる場合

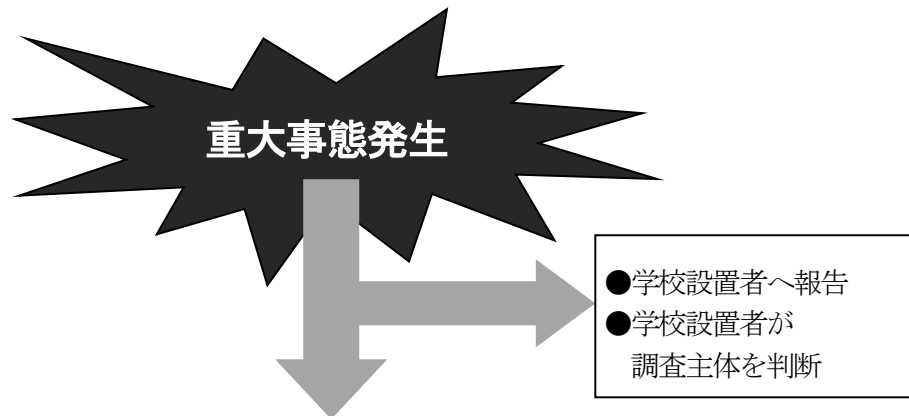
設置者の指導・支援のもと、以下のとおり対応する。

- (1) 重大事態に係る事実関係を明確にするための調査については、本校の「いじめ対策委員会」が中心となり、全職員体制で速やかに行う。
- (2) 調査の際には、重大事態の性質に応じて、適切な専門家を加えるとともに、いじめ事案の関係者と直接の人間関係または特別の利害関係を有しない第三者の参加を図り、調査の公平性・中立性を確保する。
- (3) 調査においては、いじめの事実関係を可能な限り網羅し、明確にする。特に、客観的な事実関係を速やかに調査する。
- (4) 調査結果を学校の設置者に報告する。
- (5) いじめを受けた児童及びその保護者に対し、調査によって明らかとなった事実関係について、経過報告を含め、適時・適切な方法により情報提供する。 ※関係者の個人情報に配慮する
- (6) いじめを受けた児童及びその保護者の意向を配慮したうえで、保護者説明会等により、適時・適切にすべての保護者に説明するとともに、解決に向けて協力を依頼する。
- (7) 「いじめ対策委員会」で再発防止策をまとめ、学校をあげて取り組む。

■学校の設置者（当該教育委員会）が調査の主体となる場合

設置者の指示のもと、資料の提出など、調査に協力する。

重大事態対応フロー図（学校が調査主体の場合）



いじめ問題調査委員会の設置

構成員

【学 校】 校長・副校長・主幹教諭・生徒指導主事・学年主任 等

【関係者】 指導主事・心理関係者・福祉関係者・特別支援教育関係者

【保護者】 PTA 役員・学校評議員

*構成員については、当該いじめ事案の関係者と直接の人間関係または特別の利害関係を有しない者（第三者）の参加を図ることにより、当該調査の公平性・中立性を図るように努める。

調査の実施

- 聴き取り

- アンケートなど

児童及びその保護者に対して配慮と説明を行う。

いじめを受けた児童及びその保護者への情報提供

- 調査によって明らかになった事実関係を説明する。

- 個人情報に十分な配慮をして説明をする。

- 保護者の要望を聴き取り、追加の調査及び分析等を必要に応じて行ったうえで情報提供をする。

学校設置者への調査結果の報告

（学校設置者から地方公共団体の長へ報告）

- 市町村立学校は学校の設置者へ報告する。（設置者は首長へ報告する。）

- いじめを受けた児童や保護者が希望する場合には、いじめを受けた児童や保護者の所見を添えて報告する。

調査結果を踏まえた必要な措置

地方公共団体の長が、対処が必要と認めたら調査結果について、さらに、調査を行える。（再調査）

VI 学校評価

いじめの把握及びいじめに対する措置を適切に行うため、次の2点を学校評価の項目に加え、適正に自校の取組を評価する。

- いじめを許さない、正義感のある学級づくりを推進すること
- 子どもの悩みや課題の把握に努めること

VII その他

1 校務の効率化

教職員が児童と向き合い、いじめの防止等に適切に取り組んでいくことができるようにするため、校務分掌を適正化し、組織体制を整えるなど、校務の効率化を図る。

2 地域や家庭との連携について

保護者からのいじめの事実の情報を積極的に収集するとともに、保護者の見方や考え方、心情を尊重する。保護者といじめ問題を共有し、解消に当たることが、いじめ問題に対する学校への理解の深化と不安の解消を図ることにつながる。

また、いじめ防止等にかかわる方針及び取組について、保護者及び地域に公開し、理解と協力を得る。さらに、より多くの大人が児童の悩みや相談を受け止めることができるようにするため、学校と家庭、地域が組織的に連携・協働する体制を構築する。